

キリスト信仰の87の疑問に答える

# 問いと答え

塩田多三郎

Shioda Tasaburo



伝道出版社

## 推薦のことば

月刊「みちしるべ」に長年にわたって掲載された「問いと答え」が、このたび選集として出版されますことを、心から喜び感謝しております。

本書では、「人生に関する疑問」や「聖書に関するいろいろな質問」に的確に答えられており、初めての方にも非常に理解しやすい説明となっております。

したがって、人生の悩みを持っておられる方、聖書に興味を持って初めて読まれる方に、神を知るための良き案内書として読んでいただきたいと心から願っています。また、私たち信者も、まことの神さまを知らない多くの方に伝道するための案内書として、活用させていただきます。

本書は、敬愛いたします塩田多三郎兄がご老体にむちを打って執筆された著作の中から、代表的な記事を選び出し、編集したものです。出版にあたり、ご指導を賜った藤本光夫兄に感謝申し上げます。

どうか、神さまが本書を祝用してくださり、この本を読まれた一人ひとりの方々の上に神さまの恵みが豊かにありますように祈っております。

## 目次

|    |                                |     |
|----|--------------------------------|-----|
| 1  | 人生、苦しみ、宗教、キリスト信仰について (Q 1—Q 5) | 5   |
| 2  | 聖書への疑問について (Q 6—Q 15)          | 17  |
| 3  | キリスト信仰への疑問について (Q 16—Q 24)     | 39  |
| 4  | 神について (Q 25—Q 36)              | 59  |
| 5  | 死について (Q 37—Q 45)              | 85  |
| 6  | 罪について (Q 46—Q 53)              | 105 |
| 7  | キリストのみわざについて (Q 54—Q 65)       | 123 |
| 8  | 救いについて (Q 66—Q 75)             | 149 |
| 9  | 救いの確信を持つために (Q 76—Q 80)        | 171 |
| 10 | その他 (Q 81—Q 87)                | 183 |

質問一覧

1 人生、苦しみ、宗教、キリスト信仰について

## 問1

むなしさを感じながら毎日を過ごしています。人は何のために生きているのでしょうか。

これは人生の根本的な問題と言えるでしょう。私たちの周囲には、目的や用途のないものはありません。ところが、「あなたは何のために生まれてきたのですか」と問われると、そう簡単には答えられません。それに、このような疑問を感じている人は少ないように思えます。それぞれどこか、現実の多忙な生活の中で、自分の欲望を満たすことに熱中しているように見えます。

さて、私たちは、だれひとりとして自分の意思で生まれてきたわけではありません。自分の意思とはかかわりのない他者の意思によって存在させられているのです。それがいったい何者であるのか、また、私たちが何のために生かされているのかを知ることが、つまり、人生の目的を知ることなのです。他者の意思とは、人間を創造したお方

の意思であり、それこそ万物の創造主である神の意思でなくて何でしょうか。

神が人間を創造されたことについて、聖書は次のように語っています。

「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて』。神は人をご自身のかたちとして創造された」(創世記一・26、27)。

神が人間を創造された目的については、次のように記されています。

「わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った」(イザヤ四三・7)。

すなわち、「神は、ご自分の御名がほめたたえられるために、ご自分のかたちに人間を創造された」と聖書は語っているのです。造られた者が造った者の意思に服従し、それに仕えるのは当然のことです。神は、私たち人間が神を知り、心から神を愛することを望んでおられるのです。

「神を愛する」とは、具体的には、神の戒めを守ることです。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません」(Ⅰヨハネ五・3)。

神の命令については次のように記されています。

「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』。これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです」(マタイ二二・37-39)。

これは、律法(旧約聖書の教えや戒め)の専門家が尋ねたとき、イエスさまがお答えになったことばです。

神を愛し、隣人を愛する人間が真の人格者です。人が真に「愛の人」となるとき、その人の人格は完成したと言えます。この愛が、いわゆる男女間の愛とか恋愛とかいったものではなく、神の愛であることは言うまでもありません。人間が生

来持っている愛は、肉的な愛、自己中心的な愛であり、神に喜ばれる純粋な愛ではありません。真の愛は、神を深く知り、神に仕えることよってのみ知ることができます。人生の目標を神に置く者だけが、意義ある人生を送ることができるのです。

「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい」(Ⅰコリント一〇・31)。

これこそ人生の究極の目的です。神と人とのために生きることこそ、人生の目的です。

どうかあなたも聖書を読まれ、イエス・キリストの愛をお知りになりますように。そして、この救い主を信じて、たましいの救いにあずかり、意義ある人生、生きがいある人生を送られますように心からお勧めします。

## 問2

「生きがい」とは何でしょうか。その日その日を大切に過ごすことでしょうか。

国語辞典には、だいたい次のように記されています。「生きている意義。また、生きる張り合い。生きるに値するだけの価値。生きていることの喜びや幸福感」。ですから、「生きがいを感じる」という言い方をしますし、それをもたらしてくれる源泉や対象を指して、「この子が私の生きがい」などと言ったりもします。もう少し掘り下げて説明すると、人生の意味や価値など、「人の生を鼓舞し、その人の生を根拠づけるもの」を広く指します。「生きていくうえでの張り合い」といった消極的な面から、「人生いかに生きるべきか」といった積極的な面に至るまで、広がりがあります。

以上は論理の面からの一般論ですが、次に、聖書からの視点によって説明しましょう。

あなたは、生きがいのある、満たされた生活を毎日送っておられますか。何となくむなしく、心が満たされないようにお感じになることはありませんか。たとえあなたが、物質的な面で人並み以上に恵まれているとしても、それだけでは、心から満足した生活を送ることはできません。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ四・4)というのは永遠の真理です。

あなたの心の中には、人間としての深い欲求があります。それが満たされなければ、本当の意味で満たされた生活を送ることはできません。それはいったい何でしょうか。

それは愛です。あなたの心は愛を求めています。愛し愛されることがなければ、人生は、荒れ果てた野原のように、さびしく味気ないものになってしまいます。愛を得、愛を注ぐことによつて、あなたの生活には生き生きとした張り合いが出てきます。

私たちの愛の対象は何でしょうか。あなたは、自分以外の人をお考えになるでしょうか、人間の愛だけでは不十分です。人間の愛は不完全なもの、不安定なものです。「愛の悲劇」ということばさえあります。

しかし、ここに、あなたを絶対的に愛しておられる方がおられるのです。それは、あなたをお造りになった神です。神は次のように言われます。

「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない」(イザヤ四九・15)。

「神は、実に、そのひとり子(キリスト)をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ三・16)。

神は、きのうも今日も、永遠に変わることなく、あなたを愛しておられます。この事実を知ったとき、私たちの心は喜びに満たされ、この愛に応え

たいという気持ちが生まれてきます。そして、神を愛する愛が原動力となって、人を愛するようになります。この愛を心を持った人は、いつも相手の立場に立って、本当の愛を注ぐことができるようになるのです。

「惜しみなく愛は奪う」とある作家は言いましたが、神の愛は「惜しみなく与える愛」です。あなたも、このように深い「神の愛」をお知りになり、それに応えて生きようとなさるなら、いつも心が満たされ、生きがいあるすばらしい生活が展開されていくのではないのでしょうか。



### 問3

物欲にとらわれ、快楽を追い求めるこの時代の中で、時々むなしさを感じます。でも、宗教にも抵抗を感じます。クリスチャンの友人は「いつも平安だ」と言っていますが、クリスト教に入ると本当に平安な心になりますか。

おっしゃるとおり、今日ほど多くの人が富や快楽を追い求めている時代は、今までなかったと思います。

では、欲望を満たした人が、生きる張り合いや心の安らぎを持つて生活しているかというと、決してそうではありません。高度成長がもたらしたひずみに対する反省も含めて、物質的な豊かさに価値を見いだすことへの懐疑、いわゆる「モノ離れ」が生じていることも事実です。聖書には、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ四・4)というキリストのことばが記されています。人間が生き

ていくためには確かにパン(食物)が必要ですが、神のことばによって養われて初めて、人は真のいのちに生きるのです。

ところであなたは、「宗教にも抵抗を感じる」と言っておられますが、その理由は何でしょうか。「宗教は阿片かへんである」と言ったマルクスの思想や、科学的真理と思いつまれている進化論などの影響を受けておられるのでしょうか。それとも、宗教は「世の弱者」や「人生の敗残者」が頼るものであると考えておられるのでしょうか。

しかし、聖書の教えは真理であって、宗教ではありません。旧約聖書の「伝道者の書」の著者ソロモンは栄華を極めた王でしたが、快楽の限りを味わってみた結果、「何とむなしなことか」と言っています。また、自分が手がけたあらゆる事業と、そのために骨折った労苦とを振り返って、「何とすべてがむなしく、風を追うようなものだ」とも述懐しています。そして、結論として次のように記しているのです。

「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとつてすべてである。神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ」(伝道者の書一二・13、14)。

クリスチャンである友人が「いつも平安だ」と言っているとのことですが、それは、すべてのクリスチャンにとつて真実の経験です。クリスチャンが持っている平安は、難行苦行や善い行いを積んだ結果与えられるものではありません。キリストを信じて救われた者に、キリストが直接お与えになるもので、神の恵みによるものです。

この平安は、状況や境遇に関係なく、どんな時にも信者に与えられます。キリストご自身、いつもこの平安を持っておられました。十字架にかかって私たちの身代わりの死を遂げられる前にも、次のように言われました。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしはあなたがたに与えるのは、世が与えるのと

は違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」(ヨハネ一四・27)。

よみがえられた後も、キリストはたびたび弟子たちに現れて、「平安があなたがたにあるように」(ヨハネ二〇・19、21、26)と言われました。

その後、天に上つて行かれたキリストは、ご自分を信じる者たちのために、今も天でとりなしておられます。

あなたもキリストを信じて、この平安をご自分のものとなさいますよう心からお祈りします。